

執筆者紹介 (掲載順)

コンラッド・C・クレーン

米陸軍遺産教育センター（在ペンシルベニア州カーライル市）歴史部長。米陸軍士官学校で学位を取得した後、スタンフォード大学において修士号および博士号を取得。陸軍指揮幕僚学校および陸軍大学校も卒業。陸軍大学校戦略研究所における研究官および米陸軍軍事史研究所長も歴任。*American Airpower Strategy in World War II: Bombs, Cities, Civilians, and Oil* (University Press of Kansas, 2016)、*Cassandra in Oz: Counterinsurgency and Future War* (Naval Institute Press, 2016)、*American Airpower Strategy in Korea, 1950-1953* (University Press of Kansas, 2000)をはじめとする著書、論文を多数発表しており、エア・パワーおよびランド・パワーについて幅広く執筆および講演活動を行っている。イラク戦争前にイラクの戦後復興に関する調査研究も共著で発表、イラク戦争における米陸軍による政策の企画立案に活用された。2016年には米国軍事史学会のサミュエル・エリオット・モリソン賞を受賞、長年にわたる軍事史研究への貢献が評価された。

ピーター・J・ディーン

西オーストラリア大学教授兼副総長（学事担当）、USAsia センター主任研究官。ニューキャッスル大学にて学位（優等）および教員資格を、ニューサウスウェールズ大学にて博士号（軍事研究）を取得。自らの研究のほか、学生の教育と研究の指導における経験が豊富であり、国立オーストラリア大学において戦略国防研究所主任研究官のほか、学事部次長、学生部次長等を歴任。ノートルダム大学オーストラリア校の教員も務めたほか、ニューサウスウェールズ州教育庁およびニューサウスウェールズ教員協会における活動経験がある。*MacArthur's Coalition: US and Australian Military Operations in the Southwest Pacific Area 1942-45* (University Press of Kansas, 2018)、*The Architect of Victory: The Military Career*

of Lieutenant-General Sir Frank Horton Berryman, 1894-1981 (Cambridge University Press, 2011) 等の単著があり、太平洋戦争におけるオーストラリアの経験を対象とした三部作 (*Australia 1942: In the Shadow of War* (2013)、*Australia 1943: The Liberation of New Guinea* (2014)、および *Australia 1944-1945: Victory in the Pacific* (2016)、いずれも Cambridge University Press より出版) の編集も担当。また、共著として *Australia's American Alliance* (Melbourne University Press, 2016) および *Australia's Defence: Towards a New Era?* (Melbourne University Press, 2014) も発表。その他、論文、政策提言ペーパー等を多数執筆している。

坂口 大作 (さかぐち だいさく)

防衛大学校防衛学教育学群戦略教育室・総合安全保障研究科教授。国際政治学博士。陸上自衛隊中央資料隊、陸上自衛隊幹部学校、陸上幕僚監部防衛部等で勤務。2003年から2005年までピッツバーグ大学大学院留学。その間の2004年7月から8月までヘンリー・スチムソン・センター客員研究員。帰国後、防衛研究所、防衛大学校で勤務。2013年より現職。主な著作に、「米国社会と陸軍兵力－伝統的な軍隊観と UMT 論争－」『国際安全保障』第29巻第3号 (2001年)、「The Operational, Training and Administrative Experiences of the JSDF with reference to MOOTW,” Nayer Fardows, ed., *Military Operations Other Than War (MOOTW)*, National Defense University, Islamabad, Pakistan (2008)、「日本の陸上防衛力の原点－ユーラシア大陸に近接した海洋国家の宿命－」笹川平和財団日米安全保障専門家会議報告書 (2016年)、「『我が海 (Mare Nostrum)』と陸地の影響力－『開放された海』と『閉ざされた海』－」『国際安全保障』第46巻第2号 (2018年) がある。

デーヴィッド・J・キルカレン

コンサルタント企業コルディエラ・アプリケーションズ・グループ CEO 兼社長。25年間に渡りオーストラリアおよび米国両政府に、陸軍士官、外交官、政策アド

バイザーとして奉職。この間、アフガニスタン、パキスタン、イラク、東南アジア、アフリカの角地域での職務に加え、2004年のオーストラリア国家対テロ戦略、2006年の米国 QDR、米政府対反乱ハンドブック、豪陸軍将来作戦構想「複合的戦争」等の戦略文書の策定にも携わる。2008年にはコンドリーザ・ライス米国務長官の対反乱特別アドバイザーを務めた。インドネシアおよび東ティモールにおけるゲリラ戦争の研究でニューサウスウェールズ大学から博士号を取得。米国等の高等教育機関で教鞭をとっており、*The Accidental Guerrilla: Fighting Small Wars in the Midst of a Big One and Counterinsurgency* (Oxford University Press, 2009)、*Out of the Mountains: The Coming Age of the Urban Guerrilla* (Oxford University Press, 2013)、*Blood Year: The Unravelling of Western Counterterrorism* (Oxford University Press, 2016) 等、多数の著作を執筆。

キア・ジャイルズ

英王立国際問題研究所（チャタムハウス）上級研究員。ユーラシア地域の安全保障問題を研究する、紛争研究センターの所長も務める。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの東欧・スラブ研究学院で学んだ後、BBC モニタリング（BBC Monitoring Service）でロシアに関する公開情報を利用したインテリジェンスに従事した。主な研究領域はロシアの安全保障および軍改革である。近年の研究には、*Russia's 'New' Tools for Confronting the West: Continuity and Innovation in Moscow's Exercise of Power* (Chatham House, 2016)、*A Russian View on Landpower* (U.S. Army War College, 2015) 等がある。また、サイバー空間を含む非伝統的な作戦領域についても専門的知見を有し、関連する研究成果として *Prospects for the Rule of Law in Cyberspace* (U.S. Army War College, 2017) および *Russia's Hybrid Warfare: A Success in Propaganda* (Bundesakademie für Sicherheitspolitik, 2015) がある。

岩田 清文(いわた きよふみ)

第34代陸上幕僚長。陸将(退役)。1979年3月、防衛大学校卒業(23期)、陸上自衛隊に入隊後、第71戦車連隊長、中部方面総監部幕僚副長、陸上幕僚監部人事部長、第7師団長、統合幕僚副長、第33代北部方面総監などの要職を経て、第34代陸上幕僚長となる。また、2014年10月、陸上幕僚長在任時に、米国レジオン・オブ・メリットコマンドー勲章を受勲した。現在は三菱電機株式会社電子システム事業本部顧問を務める。

平成30年度 国際シンポジウム 「新しい戦略環境と陸上防衛力の役割」

平成31年1月30日

開会セレモニー

第1セッション「陸上防衛力の過去・現在・未来」

司会：立川 京一（防衛研究所戦史研究室長）

発表者

コンラッド・C・クレーン（米陸軍遺産教育センター歴史部長）

「エアランド・バトルからマルチドメイン作戦へーベトナム戦争以後の米国の
陸上戦力ー」

ピーター・J・ディーン（西オーストラリア大学副総長）

「オーストラリア海兵隊を目指すのか？ー『地理』と『歴史』の狭間における
オーストラリアの陸上戦力ー」

坂口 大作（防衛大学校教授）

「日本の陸上防衛力の意義と役割ー戦前・戦後（冷戦期・冷戦後）を通じてー」

コメンテーター

進藤 裕之（防衛研究所戦史研究室主任研究官）

第2セッション「陸上防衛力の役割と有用性」

司会：橋本 靖明（防衛研究所政策研究部長）

発表者

デーヴィッド・J・キルカレン（コルディエラ・アプリケーションズ・グループ CEO）

「対反乱作戦及び安定化作戦における陸上戦力の役割と有用性」

キア・ジャイルズ（チャタムハウス上級研究員）

「ロシアー『ハイブリッド戦争』の観点から見た陸上戦力の役割と有用性ー」

岩田 清文（元陸上幕僚長）

「島嶼防衛における陸上防衛力の役割と有用性ー新たな戦いの時代における
陸上防衛力ー」

コメンテーター

菊地 茂雄（防衛研究所社会・経済研究室長）

第3セッション「総合討議」

司会：庄司 潤一郎（防衛研究所研究幹事）

閉会セレモニー

